

3月1日 (Sat) Berlin - 2

【巡検プログラム】

9 : 00	ホテル出発	
9 : 05	市電乗車	
	Hohenschön hausen/ Weißenseer Weg 駅《M13番or15番》	
	→Frankfurter 駅《U 5 番》	
	→Alexanderplatz 駅《U 2 番》	
	→Senefelderplatz 駅	
9 : 35	外国人墓地LAPIDARIUM見学	①
9 : 45	社会主義幼稚園	②
9 : 50	市場見学	
10 : 53	プレッツラウアーベルクPrenzlauerberg見学	③
10 : 05	シナゴークSynagoge見学	④
10 : 15	市電乗車	
	knaack str 駅《M 2 番》	
	→Alexsanderplatz 駅《S 3 番or 5 番or 7 5 番》	
	→Hackescher Markt 駅	
10 : 40	Hackescher höff 見学	⑥
11 : 45	シナゴーク 見学	⑦
12 : 00	Oranienburger Straße 駅《S 1 番》→Friedrich Straße 駅	
12 : 10	Friedrich Straße 駅構内にて昼食	⑧
12 : 50	自由行動	
	※博物館島散策 ペルガモン博物館・ボーデ美術館・ドーム・テレビ塔見学etc	
18 : 30	Kottbusser Tor 駅《U 1 番or 8 番》に全員集合	
18 : 35	トルコ人街見学	
18 : 40	夕食（ケバブ料理）	

※M：市電、S：Sバーン、U：Uバーン

【主な巡検ルート】



【巡検内容】

①外国人墓地LAPIDARIUM



訪れたのは雨雲が広がる寒い日で、そのせいか、街は重たい空気を含んでいた。Senefelderplatz駅を降りて最初の印象は、「重たい雰囲気のある街」だった。あまりよくない表現を使えば、陰鬱という様相だった。整っているけれど、どこかさびしい静かな街。この一帯はかつてのユダヤ人集住地区で、いわゆるゲットーと呼ばれる隔離地域であるという。ゲットーとは中世から存在していたユダヤ人の強制的な集住地区を指す。ナチス時代には、再びユダヤ人が住む場所を強制的に設定することで、外部のドイツ人社会から隔離が図られた。

ここで一口にユダヤ人といっても、彼らの構成する社会階層の幅は非常に広く、実は一般に人々が抱いている「銀行家」「お金持ち」といったイメージに合致するユダヤ人はその1割にも満たなかったという。彼らは「ユダヤ人」という民族的出自で集住するのではなく自らの属する社会階層ごとに集住していたため、上流階層と中産階級以下の人々が交わることはなく、ユダヤ人社会といっても決して均質な社会などではなかった。

また一部の上流階級に属するユダヤ人は、政治権力者との結びつきも強かったため、「自分たちだけは大丈夫」という意識も強かったという。1933年にユダヤ人排斥を主張するナチスの政権掌握、1938年の「水晶の夜」で大衆は社会情勢の変化を敏感に察知し危機感を募らせたが、1942年にヴァンゼー会議で「最終解決」が決定されるまで、身の安全を疑わなかった者も多い。そのために逃げ遅れた富裕層も多いという。

この外国人墓地では、反ユダヤ思想に煽動された人々によってユダヤ人の墓は引き倒された。このような現象はドイツ国内のみに見られるものでなく、ナチスが対外進出し、影響下におかれた中欧諸国でも広がっていたものである。現在では、ベルリン市がこれらの破壊された墓石の整備を行ったため外面上の墓地としての姿は回復されつつある。だが一方で、これらはすでに墓としての本来の機能は失われている。というのも、かつてこの地区に住んでいた多くのユダヤ人が強制収容所に連行され殺されたか、生き延びた者もアメリカやパレスチナに移住したため、これらの墓をたずねる子孫たちがいないからである。

残念ながらこの日は墓地が開門しておらず、外側から眺めるのみであったが、いくつかの墓石が均等な間隔で立ち並んでいるのが見えた。また、隣接する施設内には、かつての墓石が並んでおり、さながら博物館のようであった。墓としての役割は終えたのかもしれないが、これから歴史の証人として新たな役割を担っていくのかもしれない。

資料：ユダヤ人関連年表

1933 年	4 月	ユダヤ経営の商店がボイコットされる
1935 年	9 月	ニュルンベルク諸法が公布。
	1 1 月	ドイツ公民に関する法律の制定。アーリア人種でありことが官職の必須条件となる。
1936 年		ベルリン・オリンピック開催 ※開催の影響で、反ユダヤ・キャンペーン後退
1937 年	1 1 月	「水晶の夜（クリスタル・ナハト）」事件 学校からすべてのユダヤ人を追放
1939 年	4 月	ユダヤ人所有の貴重品を没収
	9 月	ユダヤ人に夜間外出禁止令が布告
1940 年	2 月～	ユダヤ人の追放がはじまる（初めはボンメルン）
1941 年	3 月	ユダヤ人が強制労働に徴用される。（初めはウィーン）
	4 月	黄色い星（ダビデの星）の着用義務化 ユダヤ人の全面的な国外追放開始。
1942 年	1 月	ヴァンゼー会議 ※「最終的解決」が決められる
	4 月	ユダヤ人の公共輸送機関の使用禁止
	9 月	ユダヤ人への食料配給が減らされる
1943 年	2 月	ベルリンの兵器工場で働く、高度な専門資格をもったユダヤ人の国外追放がはじまる。
1944 年	2 月	ソ連の進軍にともない、強制収容所の収容者は西へ移送される
1945 年	1 月	ソ連軍がアウシュヴィッツを開放

※1939 年以降、25 万人のドイツ系ユダヤ人が消え去ったと推定されている。

（pp280-282, J. テーラー/w. ショー『ナチス第三帝国事典』三交社、1993）

②Senefelder Platz

巨大な社会主義幼稚園

シナゴークから市場に向かう途中に広大な園庭を持つ幼稚園が建てられていた。このような巨大な幼稚園は女性の職業率が高い一方で、「生めよ育てよ」という方針の下、出生率の高かった社会主義時代を象徴するものである。広い園庭と、3階建の小学校のような建物から早いうちから集団性を学ばせようとしていた趣向が見て取れる。なお隣の敷地もおそらく幼稚園であり、同じ規模の園庭が見られたが、片方はグラウンドがあり遊具も整備されていたのに対して、もう片方は木が生い茂りアスレチックのような景観になっていた。なぜこのように全く違う趣の施設が隣り合わせになっているのだろうか。



③Prenzlauerberg地区

閑静な住宅街といった街並みの広がる地区である。当日は食料品を扱う市場が開かれており、小規模ではあるが品揃えがよく生活に密着したものであることが見て取れた。この地区の町並みは、同じ高さの集合住宅が通りに沿って生前と立ち並ぶ、いわゆるヨーロッパの都市といった風情である。昨日まで歩いたポツダム広場の再開発地区や中心地区の景観とは異なり、落ち着いた住宅街であり、近年人気を呼んでいるというものなげける。

Senefelderplatz駅のあるPrenzlauerberg地区（Pankow区南部）はベルリン市の中央（Mitte）に隣接した地区であり、19世紀まではワイン畑であったが、19世紀後半に急激に進行了ベルリンへの人口集中に対応し、高密の賃貸住宅が建設された。当時から、この地区では居住環境の低質さが問題となっていた。第2次大戦時には爆撃の被害を大して受けず、全住宅の72%がほぼ無傷で残された。その後東独時代には、国家の住宅政策において居住環境の良い郊外部が重視されたこと、社会主義時代を誇示するために開発された地区とは離れていたこと、ベルリンの壁に近かったこと等の理由が重なり住宅整備が行われず、荒廃が進んだ。1989年時点での、この地区の1919年以前の建築物の割合は70%に達したが、これは東ベルリンで最高値であった。しかし、東西ドイツの統一後、この地区は市の再開発地区として指定され、急速に再開発が進められている。再開発事業によって、2002年までに地区の約50%の住居が改築された。この地区での再開発の特徴はスクラップアンドビルド型ではなく、以前の建物の枠組みをそのまま利用し、街並みの概観も保存するという方法をとっている点である。市区役所当局としては、この方法を採用することによってジェントリフィケーションの誘発を防ぐという考えを持っているようである。また、特徴としてセントラルヒーティングの完備がある。ガス燃料が主流となるまでは、このあたりでは褐炭を燃すにおいがしていたという。

この地区では旧独時代に住宅整備が行われなかったため古い住宅が残っていることが逆に近年は人気を集める要因となり、カフェ、骨董屋などが増え、若者を中心として新しい住人が集まりつつある。2階以上が住宅となっている店舗付き住宅が立ち並んでおり、都心からの距離を考えると今後も需要の伸びが予想される。しかし、一方で人口構成においてはDINKS、シングル世帯の増加、若年層の増加と高齢者の減少、中高所得者の増加といった変化が見られ、実際にはジェントリフィケーションも進行しているという。都心への交通の便と景観のよさから今後も資本投資が高まるだろう。以前からのコミュニティを保つには行政の旧居住者へのサポートと地区の計画作りが不可欠であると考えられるが、行政からの再開発への補助金が減少しているという現状もあり、今後も住民の入れ替えは進行していくのではないだろうか。

シナゴークのある通りにはユーゲント様式が用いられた建物もあった。ユーゲント様式は1896年から1940年にミュンヘンで発行されたイラスト雑誌『ユーゲント』を語源とし、ドイツ圏に流行した「ユーゲントシュティール（Jugendstil）」、別名世紀末芸術と呼ばれる芸術活動で用いられた。「ユーゲントシュティール」とはドイツ語で「青春の様式」を表し、活動の担い手は若い芸術家たちであった。カーブや花を用いたデザインが施されたユーゲント様式の建物は資産階級のスータスシンボルとされた。

※本項は、①太田尚孝、大村謙二郎、有田智一、他「再統一後のベルリン市における既成市街地の再開発に関する研究：旧東ベルリン、プレントラウアー・ベルグ地域を事例として」都市計画論文集（42）、p 379～384、2007、②難波孝志「都市再開発の日独比較研究序説ーベルリン・プレントラウアーベルグと豊中・庄内のケース・スタディ（1）」名古屋短期大学研究紀要（41）、p 65～73、2003を参考にした。



Prenzlauerberg地区の街並み



市場の様子



ユーゲント様式の建物

④シナゴーク synagogue その 1

このシナゴークは1902-1904年に、当初はユダヤ人学校として建設された。1922年にはシオン派のユダヤ人学校となり、1929年に地区のシナゴークとなった。ユダヤ人の移住が禁止された1941年に閉鎖され、教員や生徒の大多数が強制収容所に収容された。その後は1999年に再開し、現在に至っている。一般的に、ユダヤ教の象徴であるシナゴークを有するユダヤ人街は、ユダヤ人社会における中産階級以下の人々の集住地区であり、いわゆる一般大衆の居住区であった。ナチ時代にはこのような地域がゲットーとして囲い込まれ、社会的な排斥の対象となった。

一見ただけでは少し重厚なレンガ造りのアパートのようにもみえ、シナゴークとは気づきにくい。しかし改めて見てみると、入り口にはユダヤ建築に特徴的な半円型のアーチ、さらに門扉にはダビデの星があしらってある。この門から入り、内部に教会があるのだろう。目立たないようなつくりになっている。また、入り口には常に警察官が立ち、車両が侵入できないようにバリケードが築かれていた。パレスチナにおける宗教対立はここにおいても垣間見ることができる。



⑤水道塔：そしてナチスの強制収容所

ナチスによって一番最初に作られた収容所が、政治犯の収容施設であったことはあまり知られていないのではないだろうか。ここでいう政治犯とは共産主義者、社会主義者、労働組合の活動家、エホバの証人の信者、同性愛者などの政治犯や社会的に危険と見なされた人物や、ユダヤ人のうちでも作家、ジャーナリスト、法律家などの潜在的な危険性を持つと考えられた人物が対象とされた。当初の強制収容所はユダヤ人のみ対象としたものではなく、むしろ国内の思想的な危険分子の一扫が終了したのちに、「ユダヤ人」を対象にした施策が厳しさを増していくことになる。

1933年、ナチスによって初めて設置されたこのエスターヴェーゲン収容所についてはよく知られていない。しかし、ユダヤ人地区の中心ともいえるシナゴークの目の前に設置されたことは、その後のユダヤ人迫害の歴史と照らし合わせることに示唆的である。実際この水道塔は小高い場所にあり、目につきやすい。この周囲で生活するユダヤ人はおそらく、いやが応にも毎日この収容所を意識させられていたのではないだろうか。収容所はまさしく権力の象徴であり、それが与える心理的圧迫感はどうほどのものであったのだろうか。



※市電に乗るため、かつてのユダヤ人街を歩き駅に向かう。
現在は整備され色鮮やかに塗装された建物も多いが、まだまだ復旧途上といった様子である



⑥Hackescher Höf

1990年代初頭から再開発が進められている地区である。まず駅に着くと、凝ったデザインの駅舎が印象的であった。地区では近年商業化が進み、駅周辺にはパブや飲食店が集積し人気のナイトスポットとなっている。古い建物が多いが、これは統一後に戦前の建造物を壊すことが禁止されたためである。Hackescher Höfは1908年完成のオフィス・住宅混合型の集合住宅郡である。今はその1階部分が商店となっており、中庭(höf)に面した四方に店舗がおかれていた。Prenzlauerberg地区といい、この地区でも生活感を残した再開発事業が行なわれている点が特徴的であると感じた。この点ではポツダム広場等、建造物を全て立て替える再開発事業とは対照的である。住宅地の名残を残し、中庭に小さな児童公園などもある生活感の垣間見える点が新しい買い物スポットとしても人気を呼んでいるのではないかと感じる。ここでは近年人気のキャラクターとなっているという「Ampelmann」(Ampelは信号の意)の専門店を見学した(<http://www.ampelmann.de/>)。Ampelmannは東ベルリンの信号で使用されていたマークである。このマークは1961年、交通量の増加にともなって急増していた交通事故を減らすため、「親しみやすいマークが歩行者の視認性をより高める」という科学的な裏付けのもと、交通心理学者のカール・ペグラウ氏によって考案されたもので、統一後信号のデザインは一度西ベルリンのものに統一されたが、デザイナーのマルクス・ヘックハウゼン氏が撤去された東ベルリン時代の信号をアートとして利用したのをきっかけに市民の間にアンペルマン復活運動が生まれ、97年に元のデザインに戻されたという。ここからは社会主義時代の遺産をただ負のものとして扱うのではなく、利用できる点は活かしていくとする動きがあることが分かる。



Hackescher Höf駅の様子



Hackescher Höfの様子



Hackescher Höf鳥瞰図

(左の写真: <http://home.q04.itscom.net/asoh/B-Scheunenviertel-Memo.html>より引用)

⑦シナゴーグSynagogueその2

駅からOranienburger Straße駅方面に歩き、シナゴーグの概観を見学。このシナゴーグはドイツ最大のものであり、1859年から1866年にかけて建設された。建築家はEduard Knoblauch(1801-1865)であり、デザインはスペイン・グラナダのアルハンブラ宮殿の影響を受けているという。1938年11月の「水晶の夜」では放火され、1943年の連合軍による爆撃でも破壊された。1958年にも破壊を受け、通りに面した建物の一部のみが現存している。しかし1988年から再建工事が始まり、1995年に再オープンした。現在は祈りの場として以外にも、「ユダヤ教に関する資料館」の役もはたし、出版社、啓蒙活動のオフィス、ユダヤ人のための図書館などが建物の中に入っている」(谷2000)。入り口の前にはやはり警備員が見張りをしており、物々しい雰囲気であった。



シナゴーグ概観

⑧フリードリヒシュトラーセFriedrich Straße駅構内

フリードリヒシュトラーセ駅は、東西分断時代の東と西をつなぐ国際ステーションであった。ベルリン鉄道網であるSバーンとUバーン（地下鉄）は戦前から整備されていたため、東西分断後も線路だけは繋がったままだった。しかしその後の敗戦によってベルリンが東西に2分割されたため、線路上にも国境が引かれた。フリードリヒシュトラーセ駅はSバーンならびにUバーンが交差するターミナル駅であったことから、空港のように検問所としての役割が併設された。そのためドイツが分断されていた1989年までは、この駅に電車が到着すると乗客全員が一度下車し、入国手続きをしなければならなかったという。

天井の低い中2階、ここにかつての検問所があった場所であるが、現在はただ広々と殺風景な空間が広がっているのみである。かつてはここで多くの外国人が入国審査を受けていたのだろうが、いま残っているのは薄暗く寒々しい光景だけである。この階段をおりると、まるで空港内にあるショッピングモールを思わせるような、活気溢れる明るい店舗が続く。天井が高く、清潔に整備されている。先ほどの旧検問所付近の薄暗い雰囲気とは対照的な景観である。この駅は当時の東ベルリンの玄関口であったことを考えると、相当な力を入れて整備されていたに違いない。まさに国の顔だったのだろう。しかし、私には、検問所の重苦しさやショッピングモールの異様な明るさが、違和感として心に焼き付いている。



周囲の薄暗さとは対照的に、ショップの明かりがやけに眩しい。



中二階、天井がとても低い



この線路は西独への亡命経路としても使われた。

⑨トルコ人街

Kottbusser Tor駅からトルコ料理の店へ歩く。駅前には新しく整備された地区であるが、概観が単調な為あまり需要がなく、外国人が多く住むようになった。トルコ人の集住地区であり、駅から店まで歩く間にもトルコ料理や菓子を売る店があった。



自由時間



右・ペルガモン美術館入場の行列
左・ペルガモン美術館入り口



右・ペルガモン美術館内部・ゼウスの祭壇で…
左・ペルガモン美術館内部・イシュタル門



右・ベルリン大聖堂内部・ドーム頂上へ向う螺旋階段
左・ベルリン大聖堂外観

参考文献

- ・ 太田尚孝、大村謙二郎、有田智一、他「再統一後のベルリン市における既成市街地の再開発に関する研究：旧東ベルリン、プレントラウアー・ベルグ地域を事例として」都市計画論文集（42）、p 379～384、2007
- ・ 谷克二『図説 ベルリン』、河出書房新社、2000
- ・ 難波孝志「都市再開発の日独比較研究序説ーベルリン・プレントラウアーベルクと豊中・庄内のケース・スタディ(1)」名古屋短期大学研究紀要（41）、p 65～73、2003
- ・ J.テラー/w.ショー『ナチス第三帝国事典』三交社、1993